



| | |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------|
| Title | スーダンの臨床の現場を肌で感じて |
| Author(s) | 山下, 創 |
| Citation | 目で見るとWHO. 2012, 50, p. 36-37 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/86745 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



スーダンの臨床の現場を肌で感じて

宮崎大学医学部医学科5年 山下 創



Tropical Hospital の入り口

私は2012年8月6日～25日までの約3週間、国際医学生連盟日本(IFMSA-Japan)の臨床留学のスキームを利用して、スーダンの National Ribat University Department of Tropical Medicine 及び Tropical Diseases Teaching Hospital にて臨床実習をする機会に恵まれました。



熱帯病外来の診察風景

実習先にスーダンを選んだ理由は、自分が医師を目指すきっかけになったのが、ウガンダにあるスーダン難民キャンプでのボランティア活動であったこと、そして、将来アフリカで臨床医として働くことに興味があり、大学でも臨床実習が始まり、日本との比較ができるようになったこのタイミングで現場の医療を体感したかったためです。



朝カンファレンスの様子

実習期間の1日のスケジュールは大学病院での8時からのカンファレンスに始まり、10時頃にはスーダンで唯一の熱帯病専門病院である Tropical Diseases Teaching hospital に移動し、熱帯感染症外来・病棟の見学をします。ラマダーン期間中であったため、日がのぼっている間は飲食禁止。途上国の人は一般にどこかのんびりしたイメージがあると思いますが、私が実習をした病院の医師・看護師は患者さんが途絶える14時～16時頃まで食事も食わず、休みなく働いていました。



大学病院の検査室にて

病院には、マラリアやリーシュマニア、寄生虫症、重症結核の患者さんが毎日のように訪れます。



Tropical Hospital の待合室

日本では教科書の中でしか出てこないような疾患で苦しんでいる人がこんなにもいるということに改めて衝撃を受けました。これらの病気に対する診断は手慣れたもので、また治療に関しても比較的充実しているのが印象的でした。



専門病院での内視鏡検査

一方で、腹水でお腹がはりさけんばかりの患者さんなど、肝炎や癌など大学病院でも見かける疾患が非常に進行した状態になってようやく病院にかかる人も珍しくないようです。

スーダンは公用語がアラビア語であるため、直接、患者さんに対して問診をするということは出来ませんが、指導医の先生に適宜会話を訳してもらい、ア

フリカ第3位の国土面積をもつスーダンならではの多様な患者さんのバックグラウンドや医療費支払いの問題、病院へのアクセスなどについて考えさせられました。また、珍しいケースに関しては聴診や触診、視診をさせてもらい、熱帯感染症をまさに肌で感じることができました。



現地の医学生と

わずか3週間ではありましたが、今回の実習を通して、途上国の医療の現状と、自分が将来、現場で働く際に何が必要になって来るか、おぼろげながら見えた気がします。また、コモンな病気は日本も途上国も大差なく、きちんとした経験を積めば、十分に臨床の現場で働いて行ける手応えをつかめました。今回の経験を糧に、少しずつ、自分の夢であるアフリカでの臨床に近づいて行きたいと考えています。



ラマダーン中の「朝食」(午前7時過ぎ)